

教育長室だより

第 38 号

2023.5.8

諸般の事情でしばらく発信を休んでいましたが、久方ぶりに発信しますのでお付き合いください。

5月8日より新型コロナウイルス感染症が第5類に移行したことを受けて、社会全体での取扱いが変わってきました。当然学校での対応が変わりました。

今回はアフターコロナの学校生活について考えてみます。

○

まず、コロナ禍が学校生活に与えた影響を総括する必要があるようです。様々な言説があり参考になりますが、わたしから見た影響をいくつかまとめてみたいと思います。

一番に目立つのは様々な学校行事や部活動の制限です。高校野球の優勝監督が「青春ってすごく密なので…」という言葉を残し、さまざまな制限がある中での生徒達の活動を讃えたことが印象に残りましたが、行事や部活だけでなく、コロナ禍は学習活動そのものに大きな打撃を与えました。

○

しかし、ペーパーテストで測ることのできる学力ははっきりした低下が見られませんでした。全国一斉休校があり、総学習時間は大きく減少したのに…です。この理由をわたしなりに考えると次のようになります。

○

教師たちは、次の学年の学習にスムーズに繋げるために国語や算数など系統性の強い教科は今の学年できちんと学ばせておかななくてはならないと考えたのではないのでしょうか。もちろんどの教科も系統性に基づいた積み重ねは重要ですが、特に国語や算数は直接的に前の学年の学習の成果に立って学習していきます。時間数も多く割り振られており“重要な教科”という意識も働きます。そして学力調査の対象となっているのはこれらの教科が中心なのです。

○

それではどの部分が時間を削減されたのか。最もしわ寄せを受けたのが特別活動だったと考えます。特別活動とは、学級会活動や全校集会や学校行事などです。密を避けるということで活動自体がしにくかったこともその理由です。そのほか、家庭科や音楽科も感染予防の観点からできない活動を多く含んでいました。これらの時間削減はどのような影響を及ぼしたかが問題ですが、解明にはこれは様々な議論を待つ必要があります。



私見を述べます。

コロナ禍の学校生活が続く中で不登校が増加しました。令和4年度の中頃から、これが顕著となった実感があります。

不登校はコロナ禍以前も漸増しており、増加の原因をコロナ禍だけに求めるのは適切でないと思います。しかし、これに大きく影響していると考えられることはできると思います。

一つは先に述べた学校生活の中心教科への偏りです。使える時間をそれらの教科を中心に使ったことで、特別活動の時間が減ったことは先に述べたとおりですが、そもそも特別活動はどんなことを身に付けさせようとするものなのかです。



特別活動は、大づかみに言えば様々な自治的な活動を通して民主的な考え方や社会性を身に付けさせることを目標としています。具体的には学級活動や全校集会、クラブ活動など、身体活動を含む様々な活動の中で級友や学校の仲間と交流しながら活動を進めます。

このような友だちと様々な関わりを持つ体験は、子どもたちが学校という社会で生活するための様々なスキルを育てていたはずで、友だち同士の交流で仲間づくりにも寄与していたはずで、

これらの機会が減ることは、子ども同士の人間関係の成立を損なっていったのではないかと思うのです。教科の授業というある意味一律のルールの中だけの生活が豊かな関係性を育むことを阻害してしまったのではないか。そしてこれが不登校増加の一因となったのではないか…。

これはあくまでも私見で、はっきりした根拠はありません。



不登校は家庭や地域の生活の中からの原因も少なくありません。コロナ禍による経済格差の拡大も学校現場の実感としてあると思います。それも大きな原因の一つでしょう。しかしこれは学校教育の力で解決できる課題ではありません。こうした一種のひずみに対して学校教育として何ができるかを考えるほうが有意義だと考えます。



単に行事や学級活動に力を入れればよいというような単純なものではないと思いますが、一つは子ども同士の学校、あるいは学級社会での状況、特に人間関係をじっくり観察することが大事な気がします。

そのためには教師の時間と心の余裕が必要なことは言うまでもありません。